第92回麻布獣医学会　一般学術演題4

多発性骨髄腫の猫の一例

○馬場　寛，市川　陽一朗

いちかわ動物病院

【はじめに】猫において多発性骨髄腫は，正確な発生頻度が分かっておらず，稀な腫瘍と位置付けられている。多発性骨髄腫の診断には，モノクローナルガンモパチー，骨髄での形質細胞の増加，ベンス・ジョーンズ尿蛋白の出現，X線上の骨融解所見，内部臓器における形質細胞浸潤の5項目のうち2項目を満たすことが必要とされている。今回，多発性骨髄腫を疑い，治療を行った猫の一例について報告する。

【症例】日本猫，未去勢オス，10歳，体重4.2kg

【症状および診断】嘔吐・下痢の消化器症状を主訴に来院。血液検査ではモノクローナルガンモパチーを伴う高グロブリン血症（A/G=0.38），黄疸，貧血が認められ，超音波検査にて，肝臓，脾臓の腫大を認めた。細胞診を行い，肝臓はアミロイド症，脾臓は形質細胞腫を疑う所見が得られた。尿検査では，比重の低下は認められなかったが，尿蛋白が出現していた。レントゲン検査では，著変は認めなかった。以上の所見から，本症例を多発性骨髄腫と診断した。

【治療】第1病日からプレドニゾロン2mg/kg SIDで処方，第9病日に腹水を認めたため，第10病日よりメルファラン2mg/m^2 EODを併用した。第24病日には腹水は消失，A/Gも0.58まで回復した。第51病日になり，尿糖が出現したため，プレドニゾロンを漸減し休薬，第60病日には尿糖は消失した。その後は一般状態も落ち着いていたので，第109病日にメルファランの休薬を行った。

第119病日，貧血の進行とグロブリンの上昇を認めたため，メルファラン2mg/m^{2}を3日に1回で再開。第143病日には病態の進行は無いものの，白血球数の減少が認められ，メルファランを4日に1回に減量した。第175病日に，病態の改善はあるものの，白血球数の改善がなかったため，メルファランを5日に1回にさらに減量した。第208病日以降は，グロブリン値，貧血，白血球数をモニターし，メルファランを適宜調節することで，第830病日を過ぎた現在も，一般状態の優良なコントロールができている。

【考察】猫の多発性骨髄腫は，予後や治療に関する情報が少ないため予後の判定が難しい。一部の報告では，腎障害，骨病変，高カルシウム血症，貧血，過粘稠症候群，感染症などの合併症を呈す。特に腎障害は，腫瘍化した形質細胞が産生する免疫グロブリン由来のアミロイド沈着によるものが予想されており，多くは進行性であることで予後不良につながっていると考えられる。また，化学療法を実施した猫において，治療反応率71％，中央生存期間は252日だという報告例も上がっている。しかしながら，本例は貧血の他，肝臓のアミロイド沈着を認めたものの，メルファラン単剤で良好な状態を2年以上維持できている。これは，早期に診断し，治療を開始できたことで，免疫グロブリンの産生が抑えられ，重篤な合併症が引き起こされなかったことが大きいと考えられる。

猫の多発性骨髄腫において，長期的に生存しているという報告例が見当たらないが，本例は治療反応も良く，2年以上も生存している。これは珍しい症例なのかもしれないが，情報の少なさ故，同じような症例が多数存在する可能性はある。今後も，より多くの症例が集まることで，正確な予後や診断，病態の解明，適切な治療に関する情報が集約されることを期待したい。